

魔導師の木

ナツシュが保育部屋で涙を流す日々を送る中、その東にある一つの村の畑でも、涙を流す者がいた。

「ああ、私は、いったいどうすればいいのか」

その老人は、日に焼けた頭を抱えて、朝焼けに照らされる自畑を見つめた。美しく桃色に輝く作物たちだったが、老人は、吐き気がしてたまらなかった。

ここに来ると、いつもそうなのだ。どれだけ朝の目覚めがよくとも、ここ来ると、たちまち内臓をかき混ぜられたようになる。作物たちが、早く取ってくれと言わんばかりに、実を太らせているのに。

「……魔導師様、魔導師様に、やはりお伝えするべきか」

彼は、よろよろと立ち上がった。けれど、頭の中がまとまらず、自室に戻って紙に向かっても、筆が進まなかった。

「……私がおかしいのか？ それとも、やはりあの畑なのか」

言いながら、老人はわかっていた。原因は、あの畑にあるだろうと。なぜなら、半年前に、仲間から妙な話を聞いていたからだ。

畑が俺を殺そうとしている、と。

◆

その手紙は、夕刻、しかるべき場所へ届けられた。魔導師の木と呼ばれるその場所は、エイネー東南部、黒い松の森が広がるティユレン丘陵に立つ巨木で、その周りは、アベドならず、松の木さえも近づかなかった。

それもそのはず、魔導師の木は、天を一人で支えるがごとく、その立派な枝葉をあたりに広げているからだ。日光を遮られてはたまらないと、松の木たちは魔導師の木から逃れるように生えていたのだが、もう一つの理由としては、魔導師の木の上には、発着場と呼ばれる、大きな円盤がくっついて、影をさらに作っていたからだった。

この円盤は、魔導師が移動手段として使う使い魔の乗り降りをする場所であり、彼らにとっては、美しい玄関と同じくらい重要な場所だった。

これを支える魔導師の木は、重さのせいか、それともあまりの不格好さに機嫌を損ねたのか、微妙に反対側へ傾いていた。

けれど、魔導師の木の可笑しなところは、もう一つあった。それは、幹にくっつく無数の小屋である。小屋は、色とりどりに塗り分けられていて、赤ん坊の唇色や、夏の夕焼け色、真冬の夜色に、雲の白色、煌めく日光色など、さまざまだった。

た。

こう見ると、たいへん賑やかそうな場所に見えたが、聞こえるのは森の動物たちの鳴き声だけで、アベドの話し声は、一つもしなかった。

ここへ手紙を届けに来たアベドは、郵便受けをさっさと後にした。黒い松がまわりでひそひそ喋り、隠れた生き物たちがこそそ這いまわり、ちよつとでも長くいたら、何者かに皮をはがされそうな気がしたからである。

さらには、頭上に広がる発着場に、巨大な梟の影が近づいたのを見て、そのアベドはさらに怖くなり、飛ぶようにティユレン丘陵を去った。

さて、発着場に降り立った梟は、その背中から一人の老女を降ろした。茶けた頭巾の下で、二つの紫の目が輝いく。老女は小柄で、背が少しばかり曲がっていたが、実にてきぱきと動いた。老女が指を鳴らすと、梟の鞍が力尽きたように外れてまとまり、梟はみるみる縮んでいった。まるで、老女の指示に従わないなど、ありえないという具合に。

巾着ほどにまとまった鞍を腰に付けながら、老女が魔導師の木へ入ろうとすると、その扉がこちらへ開かれた。

「ああ、ノウア。帰ってきてくれて助かったわ。依頼が山積みで、手が回らなくて……」

出て来たのは、こちらも紫の目を持った、長身の女だった。まっすぐな黒髪を

背中までのぼし、たったいま帰宅したかのようなざわめきがあった。彼女は、手にいくつもの筒を抱えていた。重要な文は、木筒や粘土筒に入れて配達されるので、中身を見なくても緊急だとわかるが、その量に、魔導師ノウアは、「あゝりやりゃ」と言った。「というか、あんたも帰っていたのか、アリア」

老女ノウアは、後ろへ腕を伸ばしながら言った。その腕に、さっきの縮んだ梟が舞い降りた。だが、もはや梟とは言えず、みずぼらしい鳥人形と言ったほうがよかった。目玉はボタンになり、羽は波模様の布になり、胸は麻布にかわって、縫い目はところどころほつれていた。

「でも、これからまた出かけるところよ。狩りの村へ行くの。〈夢炎^{エンペーウナ}〉という魔法動物を退治する計画を練りに」

アリアは言うや、中に入り、「お茶でも飲む？」と訊ねた。

「いいや。仮眠したら、その手紙のどれかをやるよ。……見せてみ」

アリアは、ノウアに筒を渡すと、自分は居間の椅子に掛けてあった貫頭衣をまとった。

食事台にも筒が山ほどあった。ノウアは、頭巾をうしろへはずし、白髪を後ろで縛った。鳥人形が、ないはずの声帯で鳴きながら、天井の渡し木へ飛んでいく。

「本当にみんな急用なのかね？ こおんなにたくさん！ 全部開けたらハチの巣が作れそうだよ」

「……みんなノウアを信用しているのよ」

貫頭衣から髪を出しながらアリアは言ったが、本当に言いたいことを隠している、自分もノウアも、わずかな沈黙でわかっていた。

「なぜ魔法動物の被害が、ここ数年増えていると思う？」

彼女の意をくみ取ったノウアは、若き魔導師に訊ねた。

「……。私は、思うに、なにかに引き寄せられているんじゃないかしら。例えば………いいえ、わからないわ」

真実を言うアリアは、ゆっくりだった。老魔導師は、ため息をついて、一つ手紙を読んだ。

「いずれ、他の仕事人たちにも手伝ってもらわなきゃならないかもしれん。……もう、三人だけじゃまわせないからな」

アリアは、鞆を肩に掛けながら、複雑な色をその目に浮かべた。……三人？
本当にそうかしら。

「来月の長おきの会で、提案するのもいいかもしれないわね」

アリアは、各村のお頭たちの集まりのことを言い、そのまま発着場へ出て行った。

ノウアは、手紙を読みながら、もう一人の幼い魔導師のことを考えた。魔導師になりたくない、そう言った少女のことを。

けれど、次の筒を開けたとき、土がぱらぱらと出てきたので、ノウアはそれどころではなくなった。

食事台にこぼれた土は、湿っぽく、良質な畑の土だということがわかった。おまけに、海のように青い苺、ナルウ苺まで入っていた。

だが、ノウアは、さっと筒を投げ出して、土とナルウ苺から遠ざかった。それは、悍ましい虫の大群をみているかのようなようだった。なぜこんな悪寒が走るのか、自分でもわからなかった。天井の鳥人形は、警戒の鳴き声を発した。

「ストロキント、あたし的には、この依頼、引き受けたくないんだがね。あんたはどう？」

ストロキントと呼ばれた鳥人形は、布の翼を震わせた。角へ角へと、身を縮める。

ノウアは、ぞわりと鳥肌がたつ手を、なんとか伸ばし、放り出された手紙を吊り上げた。

土にまみれたその手紙には、こう書かれていた。

拝啓 魔導師様

突然のお手紙、失礼いたします。自然の人〈耕しの者〉ヨウスと申します。

私は今、苦しみの渦中におります。問題となるのは、耕している畑でございませう。

しかし、なんと申してよいのやら、どう説明したらよいかわかりません。

ですから、ご参考までに、畑の土と、採れたナルウ苺を同封いたしました。あの畑にいただけで、私は気分が悪く、内側から滅ぼされていく感覚に陥ります。そのせいで、丹精込めた作物たちを愛せずにいるのです。この身を切られるような気持ち、わかっただけですしょうか。

どうかお助けください。私の気がおかしくなる前に、どうか魔導師様と影の人の救いを。

自然の人 耕しの者 ヨウス

敬具

ノウアは、手紙を投げた。食事台にぶちまけられた土を見つめる。

突然、老魔導師は部屋をとび出し、大きな瓶と布を持ってきた。彼女は、布を土にかけ、それから、燐寸を擦って火を放ち、すぐに水をかけた。最後は、ぶつぶつ何かを呟きながら、ぐしゃぐしゃになった布を凝視した。すると、布は土をからめとって浮き上がり、用意された瓶の中へ大人しくおさまった。

ぴったり瓶に蓋をしてから、ノウアは考え込んだ。心臓が痛いほど脈打っている。長年、魔導師として、エイネー中のあらゆる呪いを解いてきたノウアだったが、そうであるからこそ、これがどれほどよくない状況なのか、わかっていた。

彼女は、鳥人形に言った。

「仮眠はあとだ。自然の村に飛ぶよ」

自然の村に着いたのは、夜中だった。それでも、依頼主のヨウスは、魔導師の訪問を歓迎した。彼は涙を流し、膝から崩れ落ちた。

「おやおや。骨が抜かれちゃったみたいじゃないか。まあ、その気持ちもわかるけど。大丈夫かい？」

ノウアは、自然の人の肩に触れた。痩せ細りぶるぶる震えていたが、ヨウスは、しっかりとその手を握り返した。

「私は、とんでもないことをしてしまいました。とんでもないことを、とんでもないことを」

「別に、土を入れてきたことは、咎めないさ。あれで、ここに来たわけだし」

だが、ヨウスは、首を振って立ち上がった。彼の目にくっきりと隈があることに、ノウアは気付いた。

「違うのです、ノウア様。私は、仲間の焔を……も、燃やしてしまったんです」

「どういうことだ？ 問題の焔は、お前さんのじゃなかったのか」

「あれは、イエリオットののです」

言ったのは、ヨウスの後ろからやって来た、目の大きい青年だった。青年は言った。

「もともとイエリオットのものだった畑を、ヨウスさんが管理したんですよ」

「ええ、そう。ダンタラーケの言うとおりです」ヨウスは頷いた。「でも、私は、それを燃やしてしまったんです。あまりにも、耐えられなくて」

ノウアは、自分が魔導師の木でしたことを思い出した。

「あれは、どこかへやらないといけない代物だった。あたしもそう感じたよ。……イエリオットはどこにる？」

ノウアの問いに、青年ダンタラーケの顔が歪んだ。

「イエリオットは……」

「昨年死にました」ヨウスが引き継いだ。

「彼は、山の方にも薬草畑をもっているんですが、そこで山犬に襲われて……嘔み傷が悪化して、ぽっくりです。若かったのになあ……」

ヨウスが涙声で言い、老魔導師は、そうかと呟いた。「そうとは知らず……。ご愁傷様」

「でもイエリオットは、死ぬ半年前に、こう言ったんです。畑が俺を殺すって」

ヨウスは、家から出て来ながら、「あそこの畑なんですけどね」と真っ暗闇を

指さした。

「ということは、あんたは、半年間ずっと我慢していたのか？」

「いいえ。それが違うんです。私が異変を感じたのは最近のことで、イエリオットも、一度言ったきり、『あれは冗談だった』と言ったんですよ」

ノウアは、眉をひそめた。

「どういうことだ？ イエリオットが言ったことは嘘だったってことか？」

「そこが、私にもわからないのです。イエリオットは、かまってちゃんところがありますからね。だから私も、はじめは取り合わなかったんです。いま思うと、ちゃんと向き合えばよかったですけど」

「あんたは、なにも知らないのか？」

ノウアは、ダンタラーケに顔を向けた。

「俺は、一緒に行動していたりしましたが……本当に、なにも」

ダンタラーケは、悲愴な面持ちで、鼻の脇を掻いた。彼の大きな瞳からは、いまにも涙がこぼれ落ちそうだった。

「明日の朝、またここに来る」ノウアは言った。「直接、畑を見に行く」

次の日、ノウアは、ヨウスの畑を支柱で掘っていた。周りには、灰になった野菜が散らばり、ヨウスはというと、離れた畑道で慟哭していた。

真っ青に色づいた、甘いナルウ苺も、子どもの頭ほど太った、葉物の地の花も、

こうなってしまえば買い手がつかなかった。無論、ヨウスは、わかっているの決断だった。だれも近づくことができなくなった以上、収獲しても売れないことは確かだった。そして、それをアベドの口に運んでやるものかという、正真正銘、自然の人〈耕しの者〉の自尊心が、彼にあったのである。

魔導師ノウアは、全身を這う悪寒に耐えながら、必死に土を掘り起こした。

そして、そこから鉛色の液体がぐずぐず出てくるのを見ると、とたんに二、三歩離れ、嘔吐した。ヨウスはというと、悲鳴を上げてにげだした。

少しして、ノウアは、離れたところで畑を見やった。北東を走る人差し指山地ユーロシナンからの風が、彼女の白髪を乱した。

「それで、なんと見ますか、ノウア様」

別の畑で仕事をしていたヨウスが戻ってきて、疲れたように訊ねた。

「あたしは、七百種ある魔法動物の呪いを知っていると自負しているが、あいにく、また新しいのができたってところかね」

ヨウスは、ぎよっとして、草刈鎌を握った。

ノウアは、額に玉となって浮かんだ冷や汗をぬぐった。

「原因は、あの鉛色の液体にありそうだが、どうもわからん。イエリオットが魔法動物の恨みをかったのか、それとも、この呪いをかけた魔法動物には、なにか意図があるのか……。イエリオットが亡くなったのが、一番悔やまれることだな」

ヨウスは、うなだれた。哀れな老人は、二つの死に懺悔していた。

老魔導師は、抱え膝になって、焼けた畑を見た。紫の目がぎらつく。彼女は、

この問題が一筋縄ではいかないと確信しはじめていた。

要因はすべて、イエリオットにあった。